

心の大きな変化を抱き続ける

七十人

デーブル・G・レンランド

最後まで堪え忍ぶためには、熱心に神を喜ばせ、真剣に神を礼拝する必要があります。

1967年12月、南アフリカ・ケープタウンで、最初の成功例となった心臓移植手術が行われました。瀕死の男性から病気の心臓が摘出され、死亡した提供者からの健康な心臓が縫合されました。それ以来世界中で、7万5,000件以上の心臓移植手術が行われています。

心臓の移植を受けると患者の体は、命を救うはずの新しい心臓を「異物」と判断して攻撃を始めます。それに対して何も処置をしなければ、自然な反応として体は新しい心臓を拒否し、患者は死に至ります。薬によってこの反応は抑制できませんが、毎日処方されたとおりに服用しなければなりません。さらに、新しい心臓の状態を観察する必要があります。時には、心臓からわずかな組織を採取して顕微鏡で検査する生体検査を行います。拒否反応の兆候が見られれば、それに合わせて薬が処方されます。拒否反応を早く見つけることで、死を防ぐことができます。

驚くのは、移植された心臓に対してむとんちゃくになる患者がいることです。薬をきちんと飲まず、必要な検査を必要な回数受けないのです。体調は良いから、すべて大丈夫だと思うのです。多くの場合、このような近視眼的な考えは患者を危険にさらし、その命を縮めてしまいます。

心臓疾患で死亡する人々でも、移植により寿命を何年かでも延ばすことができます。しかしそれは、1967年に『タイム』誌1 (Time) が語った「究極の手術」ではありません。¹究極の手術とは肉体に関するものではなく、霊的な「大きな心の変化」です。²

キリストの贖いを通し、また福音の律法と儀式に従うことにより、わたしたちはこの究極の手術である、霊的な心の変化を経験します。罪の結果、わたしたちの霊の心は病気になってかたくなになり、霊の死を受けて天の御父から離れてしまうようになります。主はすべての人が必要とする手術について語っておられます。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け、あなたがたの肉から、石の心を除いて、肉の心を与える。」³

しかし、心臓移植と同じように、霊の心の大きな変化は始まりにすぎません。悔い改めとバプテスマ、確認は不可欠ですが、それで十分ではありません。確かに、わたしたちが最後まで堪え忍ぼうとするなら、移植した心臓に注意を払うかのように、変化した霊の心に深い注意を払う必要があります。そうして初めて、裁きの日にわたしたちは罪のない者と認められるのです。⁴

終わりまで堪え忍ぶことが難しい場合もあります。なぜなら、生まれながらの人は、霊的に変化した心を拒否し、かたくなにしてしまう性癖があるからです。主が「人が恵みから落ち…誘惑に陥らないように…まことに、聖められている人々でさえ用心しなさい。」⁵と警告されたのも不思議ではありません。

大きな心の変化を経験したにもかかわらず、その後生まれながらの人になってしまった人がいることは、だれもが知っています。そのような人は神への礼拝と献身をおろそかにするようになり、心をかたくなにして永遠の救いを危険にさらしてしまいます。

モーサヤの息子たちの伝道によって改宗した人たちの人生を見ると、霊的に大きく変化した心を拒否しないためにはどうすればよいかを知ることができます。次のように記されています。「アンモンと彼の同僚たちが……行った宣教……によって……真理を知るようにな〔り〕……主に帰依した人は皆、二度と道を踏み外さなかった。」⁶彼らはどのようにして最後まで堪え忍ぶことができたのでしょうか。わたしたちには次のことが分かります。つまり、「彼らは、神と人々に貢献する熱心さでも秀でていた。彼らはすべてのことについてまったく正直でまっすぐであり、また最後まで確固としてキリストを信じた。」⁷

神に対する彼らの熱心さは、神を喜ばせ、真剣に情熱をもって神を礼拝しようとする熱意の表れでしょう。人々に対する熱心さは、人を助け、仕えたいという強い関心を示しています。すべてのことについてまったく正直でまっすぐであるとは、神と人に対する義務を都合に合わせて正当化するようなことをせずに聖約を固く守ったことを示唆しています。さらに、彼らは子供たちをわたしたちは彼らが誘惑から離れようとして武器を埋めたことを知っています。

彼らは、きっと霊的に変化した心の状態を頻繁に見詰め直していたのでしょう。すべて順調だと簡単に決めつけたりはしませんでした。変化した心を見つめ直すことで、初期段階のかたくなさや拒否反応を見つけて対処することができました。

息子アルマは、アンモンとその当時の人々に、霊的に変化した心の検査とも言える一連の質問をしています。「もしあなたがたが心の変化を経験しているのであれば、また、贖いをもたらす愛の歌を歌おうと感じたことがあるのであれば、今

でもそのように感じられるか尋ねたい。」さらに、十分にへりくだっているか、高慢やねたみはないか、兄弟に親切かと聞いています。⁹このような質問に正直に答えることでわたしたちは、細くて狭い道からそれでも早い段階ですぐに戻ることができ、正しく聖約を守ることができます。

1980年、わたしたち家族は、研修所兼仕事場である病院とは道を隔てた所に住んでいました。勤務は日曜も含め、毎日でした。日曜の午後2時に仕事が終われば、2時半に始まる集会に間に合うように妻と娘に合流し、教会まで車を運転していくことができました。

研修1年目の終わりのある日曜日です。2時には仕事が終わろうでした。しかし、もう少し長く病院にいれば妻と子供はわたしを待たずに出かけることが分かっていました。そうなると歩いて帰り、必要な仮眠が取れます。残念ですが、わたしはそれを実行しました。2時15分まで待ち、ゆっくり歩いて帰り、寝ようとソファに横になりました。でも、眠れませんでした。落ち着かない、不安な気持ちでした。それまではいつも教会に行くことがとても好きでした。それなのに、以前感じていた証の炎も情熱も、今日はなぜないのだろうと思いました。

長く考える必要はありませんでした。忙しさを理由に、わたしは祈りと聖文の研究をおろそかにしていたのです。朝起きて祈り、仕事に行くと、昼がいつの間にか夜になり、また昼となって、帰宅が翌日の夜遅くなるのがよくありました。とても疲れて、祈ったり、聖文を読んだりする前に寝てしまっていました。翌朝、また同じことの繰り返しです。大きく変化した自分の心を石に変えてしまわないために必要な、基本的なことをしていなかったのが問題でした。

わたしはソファから起き上がってひざまずき、神に赦しを求めました。これから変わることを天の御父に約束しました。翌日はモルモン書を持って病院に行きました。その日を境に、わたしは「実行項目」リストに二つの項目を記すようになりました。それは、毎日必ず、少なくとも朝晩祈ることと聖文を読むことです。深夜になって、急いで一人になれる場所を探して祈ることもありました。短時間しか聖文の勉強ができない日もありました。わたしはまた、たとえ全部は出席できなくても必ず教会に行く努力をすることも天の御父に約束しました。数週間後には、情熱が戻り、証の炎も再び勢いよく燃え出しました。どのような状況にあっても、これら一見ささいに見えることをおろそかにして霊的な死のわなに陥り、永遠の本質にかかわる事柄を危険にさらすことは二度としないと約束したのです。

最後まで堪え忍ぶためには、熱心に神を喜ばせ、真剣に熱意をもって神を礼拝する必要があります。つまり、イエス・キリストへの信仰を持ち続けるために、わたしたちは祈り、聖文を研究し、毎週聖餐にあずかり、常に聖霊を伴侶とするこ

とが必要なのです。積極的に人々を助けて仕え、福音を伝える必要があります。どのような状況にあっても、神との聖約や人々への義務に対して決して妥協せず、すべてのことにおいて、完全にまっすぐで正直でなければなりません。家庭にあってはキリストのことを話し、キリストのことを喜び、キリストのことを説教する必要があります。そうすることで、子供たち、そしてわたしたち自身に、贖いを生活の中で生かしたいという思いが生まれてきます。¹⁰わたしたちの周りにたやすく取り巻く誘惑を認識する必要があります。誘惑をはるか彼方へ遠ざけましょう。最後に、大きく変化したわたしたちの心を頻繁に検査して、かたくなな状態の初期の兆候を正さなければなりません。

自分の変化した心の状態を考えてください。むとんちやくになるという生まれながらの人の性質が原因となる拒否反応はありませんか。もしあるなら、ひざまづくことのできる場所を皆さんも見つけてください。これが地上での寿命が短くなること以上の深刻な問題であることを忘れないでください。永遠の救いと昇栄、という究極の手術の実を失う危険を冒さないでください。

キリストを確固として信じ、喜びをもって最後まで堪え忍ぶことができるよう、¹¹ イエス・キリストの御名により祈ります。アーメン。

注

1. **Time, Surgery: The Ultimate Operation**, 1967年12月15日（金曜日）号, 64.
2. モーサヤ 5 : 2 ; アルマ 5 : 12-14 参照
3. エゼキエル 36 : 26
4. 3 ニーフアイ 27 : 16 参照
5. 教義と聖約 20 : 34
6. アルマ 23 : 6
7. アルマ 27 : 27
8. アルマ 5 : 26
9. アルマ 5 : 27-30 参照
10. 2 ニーフアイ 25 : 26 参照
11. ディーター・F・ウクトドルフ 「喜んでよい理由はないだろうか？」 『リアホナ』 2007年11月, 18-21.